

当院の溶連菌迅速検査 陽性症例の検討

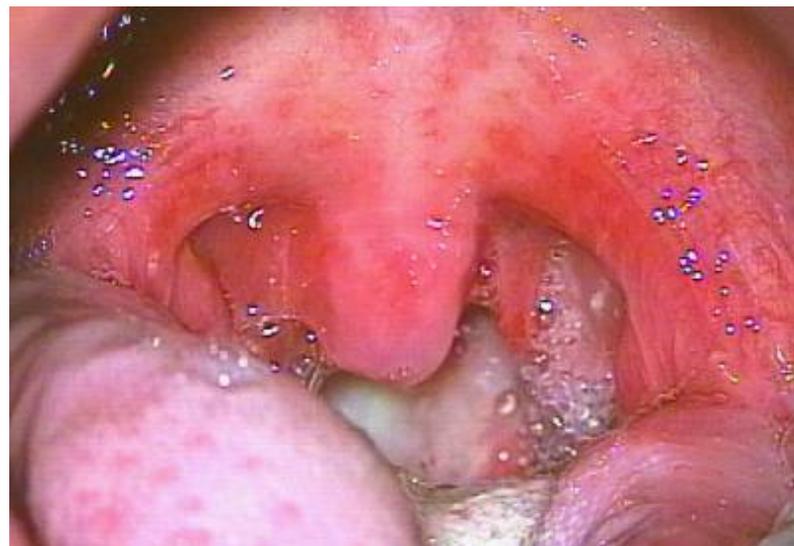


おひさま耳鼻咽喉科
五十嵐 良和

はじめに

当院では 従来 発熱 強い痛みをともなう咽頭炎 や 扁桃炎
扁桃周囲膿瘍症例 に 溶連菌迅速検査を 施行していた
本年に入り

咽頭炎所見がはっきりしない
症例を いくつか経験し
溶連菌感染症の多様性を実感



そこで 迅速検査陽性症例の
臨床統計を まとめてみることにした

当院の溶連菌迅速検査キット



対象と検討項目

期間 2010年11月～2011年2月

溶連菌迅速検査施行 389例

陽性 88例(22.6%)

検討項目

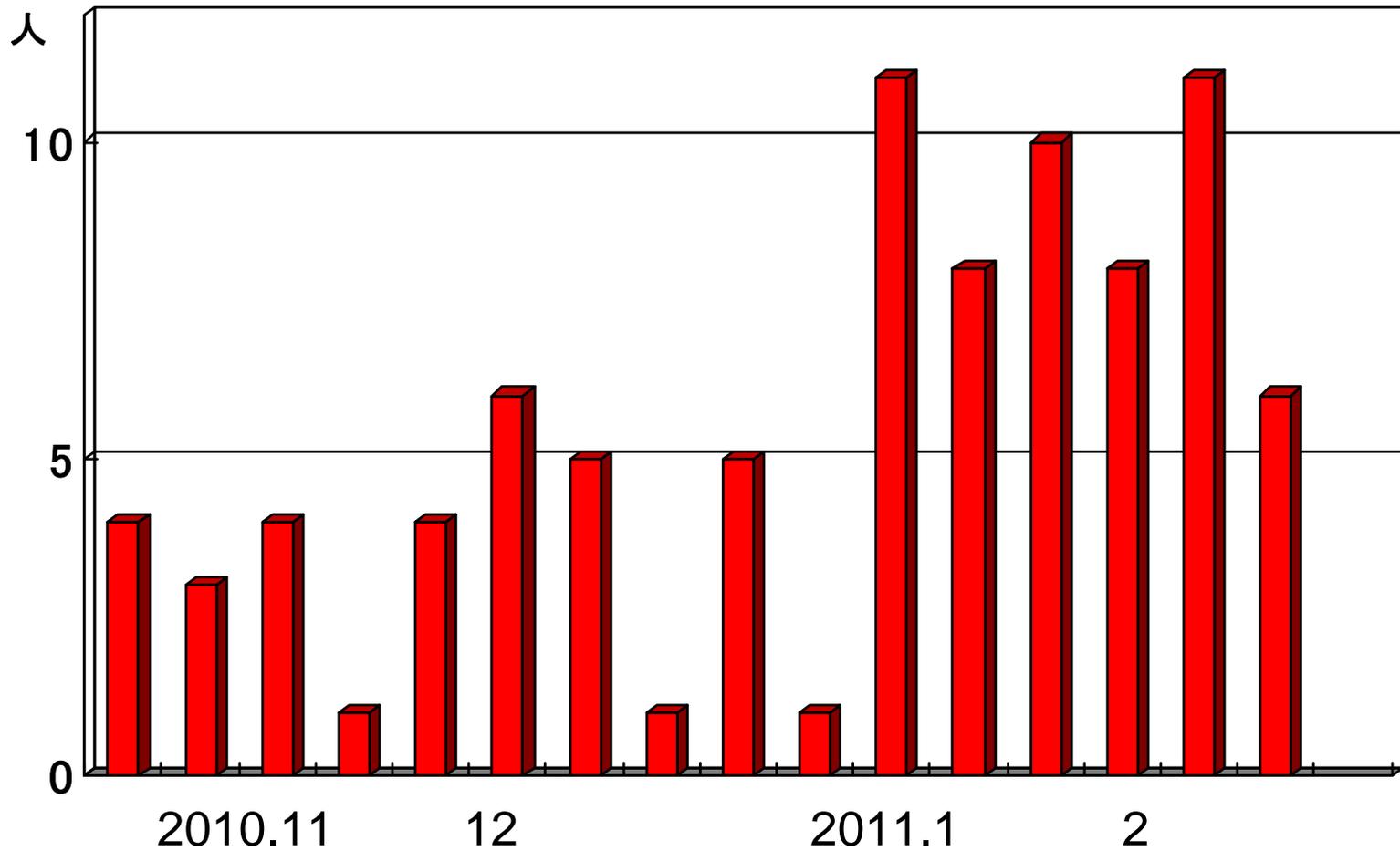
陽性数(率)の推移

年齢分布

臨床所見の発現率

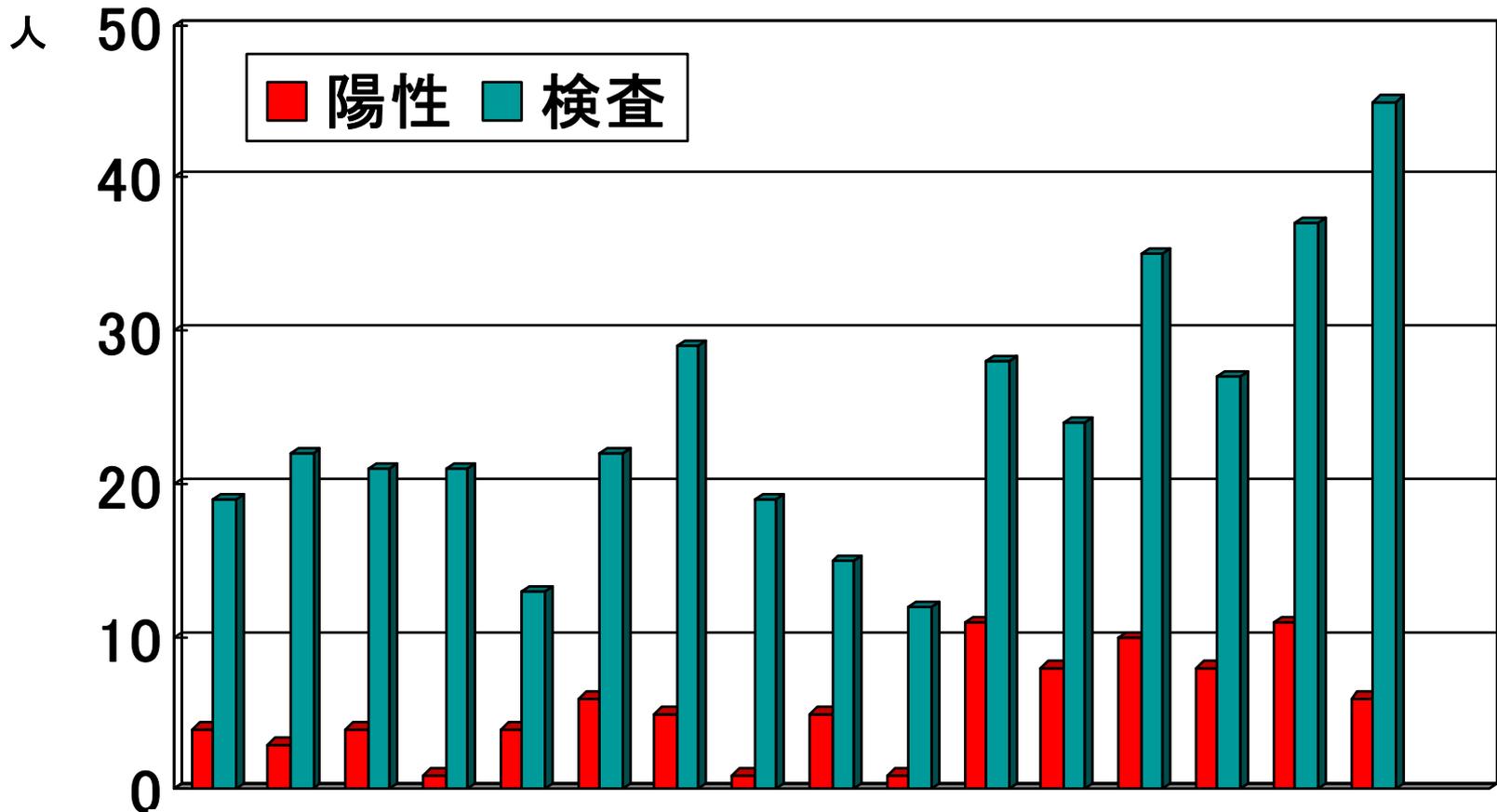
印象に残った症例を紹介しながら結果を提示

陽性数の推移(週ごと)



降雪とともに増加

陽性率の推移



2010.11
陽性率 14.7%
(平均22.6%)

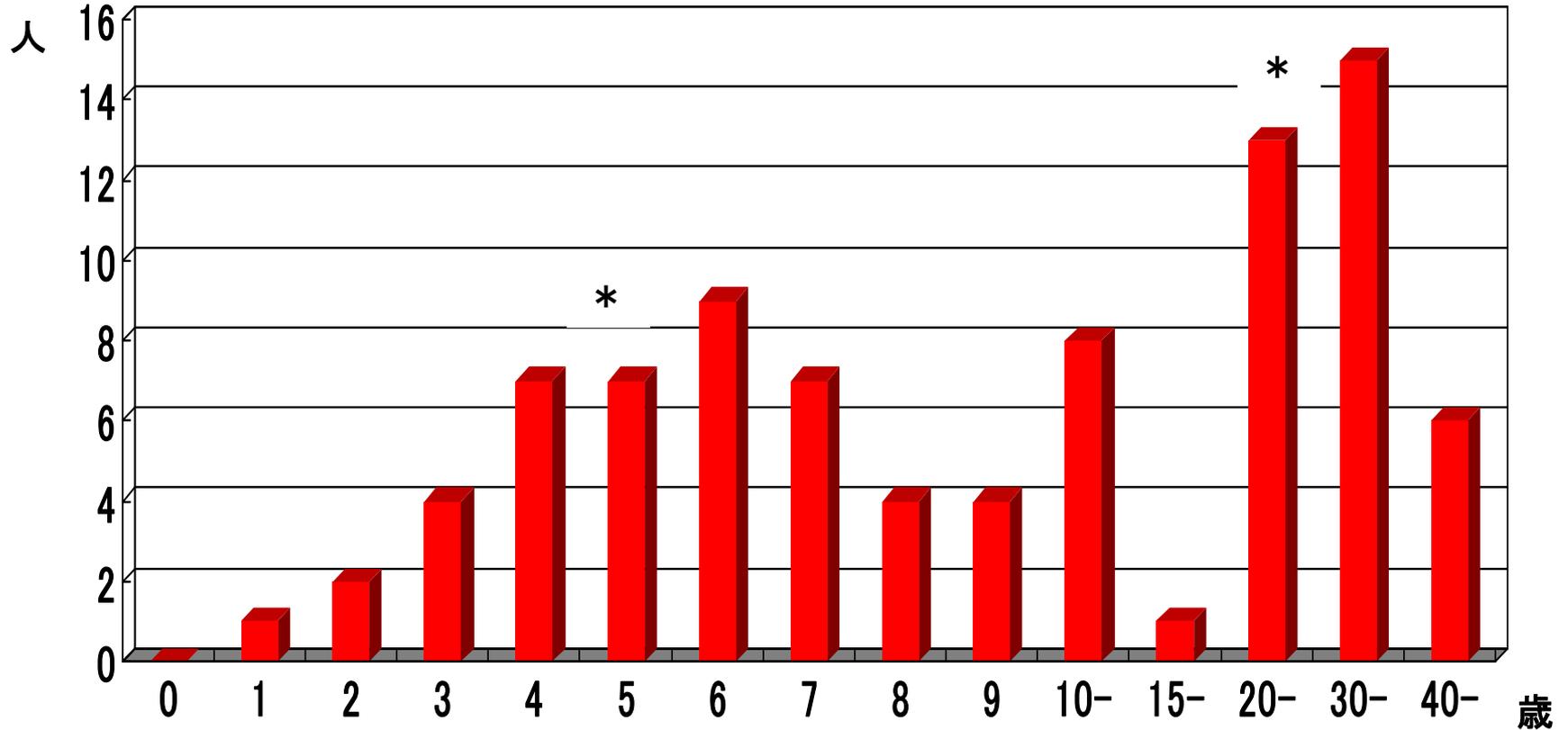
12
21.4%

2011.1
31.2%

2
24.3%

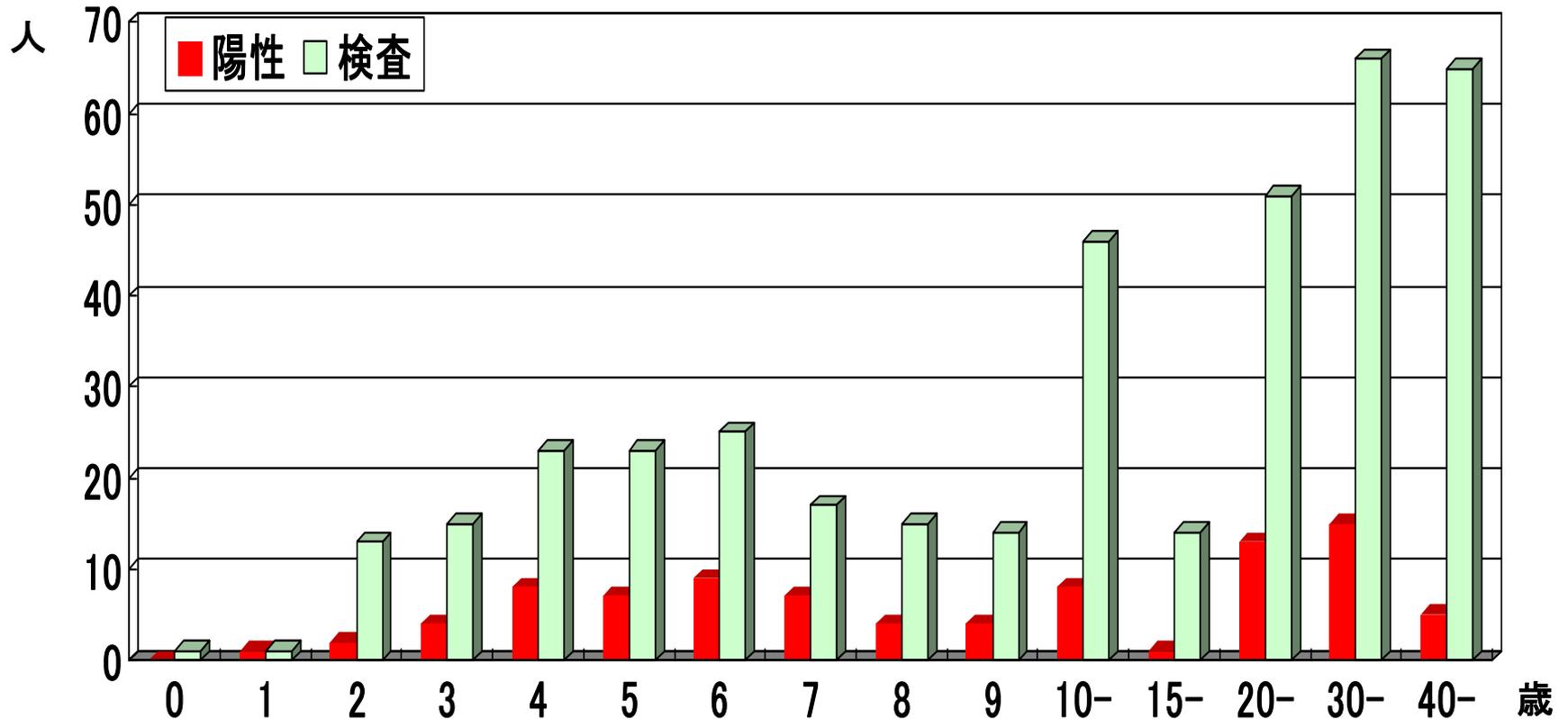
1月は陽性率が高かった
グラフにない3月は43%

陽性例の年齢分布



小児は4-7歳 成人は20-30歳台に多い

陽性率を年齢で比較



陽性率 0-9歳 31.4% 10歳以上 17.4%

小児の陽性率が高い

溶連菌感染の症状が多彩なことを示唆する家族症例

子供 7歳 朝方の咳



子供 10歳 鼻つまり



母親 36歳
強いのどの痛み



三人とも発熱なし
咽頭発赤は母親のみ
全員溶連菌陽性

朝の痰 鼻つまり 4歳 ♂

幼少時から中耳炎 副鼻腔炎を繰り返している
体温 37.3度

鼻腔所見良好だが
咽頭粘膜の
発赤腫脹強い

溶連菌陽性



発熱 両耳の痛み 4歳 女



両側中耳炎
膿性鼻漏も多量
咽頭粘膜発赤+



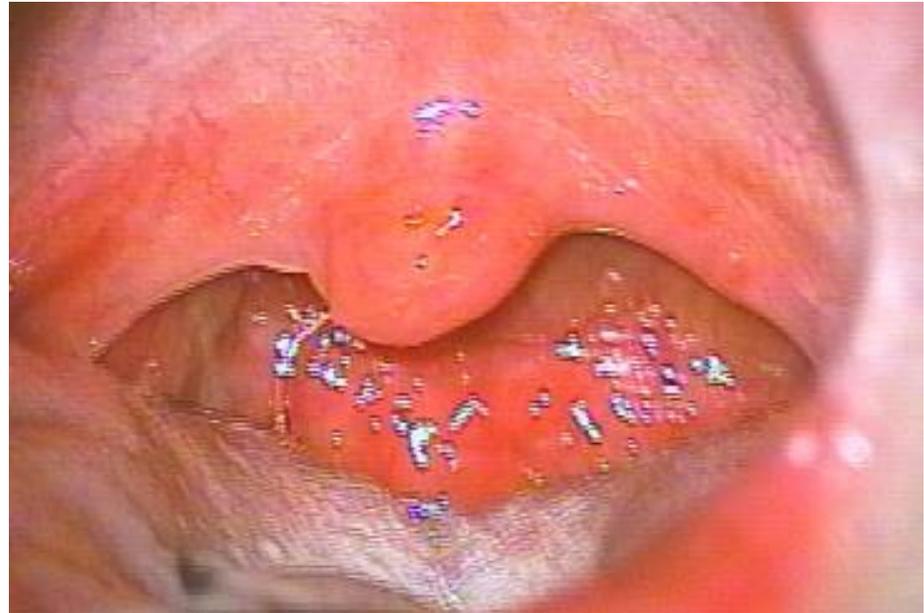
いつもは鼻漏培養をするところを
あえて溶連菌迅速検査を施行
→ 陽性

発熱 右耳の痛み 9歳 女

右中耳炎



咽頭粘膜発赤



迅速検査 陽性

中耳炎でも咽頭の観察が重要であることを感じさせられた

首のリンパ節腫脹 12歳 女

風邪症状のあと
両側頸部に複数のリンパ節腫脹＋
発熱なし
咽頭所見良好

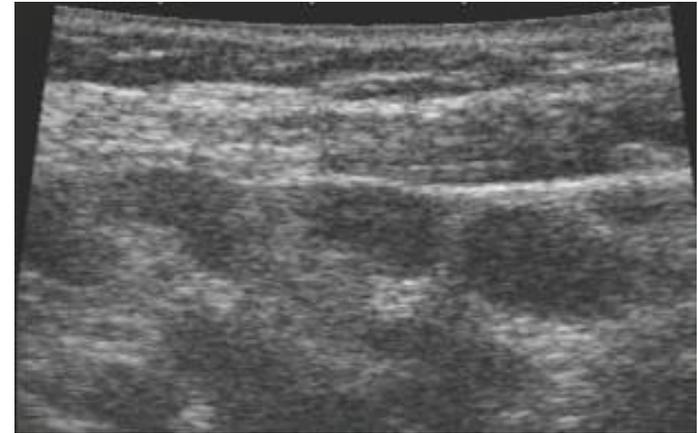
しかし
迅速検査陽性



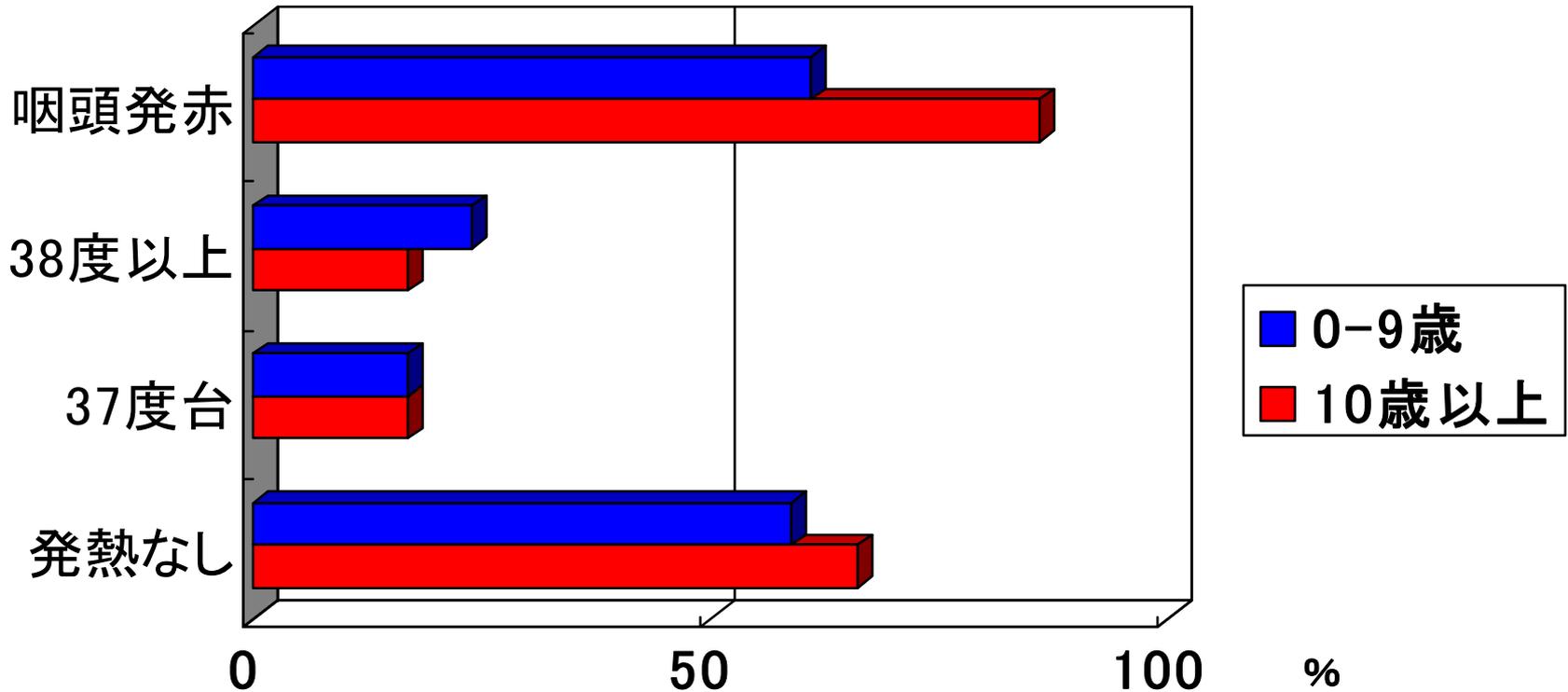
両耳下部の痛み リンパ節腫脹 34歳♀

エコーで
複数のリンパ節腫脹を確認
体温37度台

咽頭発赤軽度だが
迅速検査で陽性



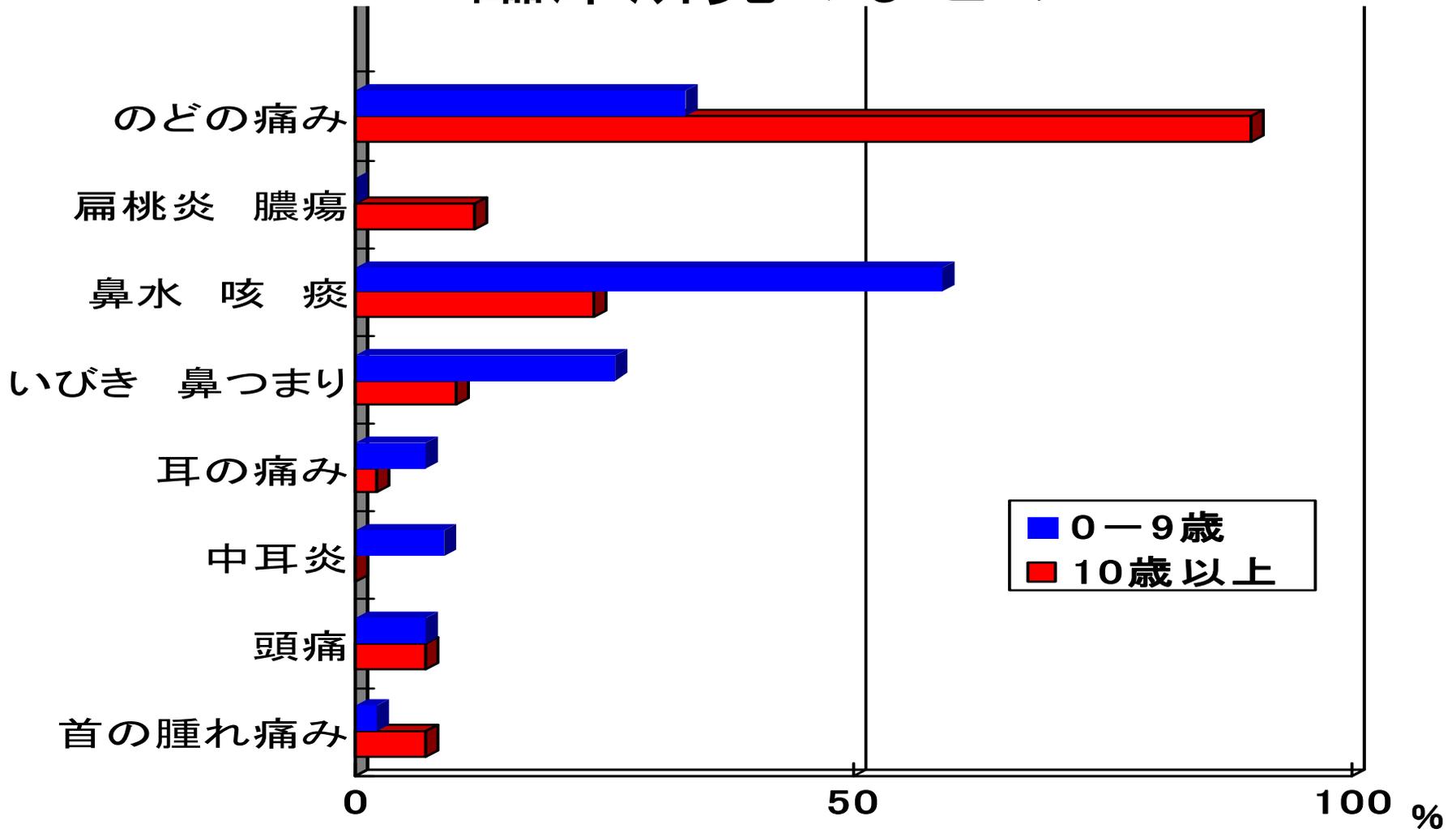
咽頭粘膜発赤と発熱の出現率



咽頭発赤は 0-9歳 やや少なめ

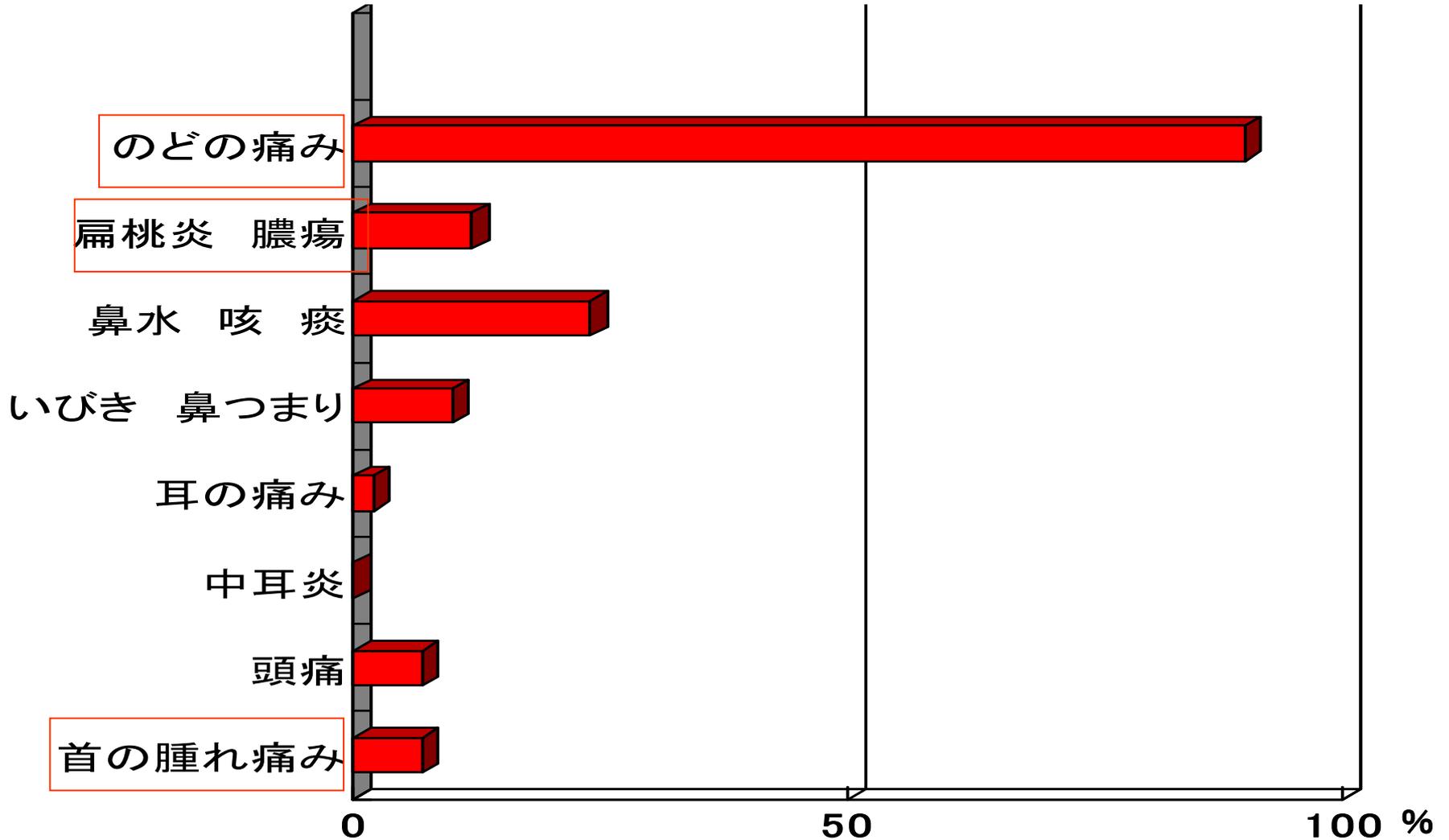
発熱は いずれも 60%近くなし

臨床所見のまとめ



0-9歳と10歳以上は臨床所見が異なる印象

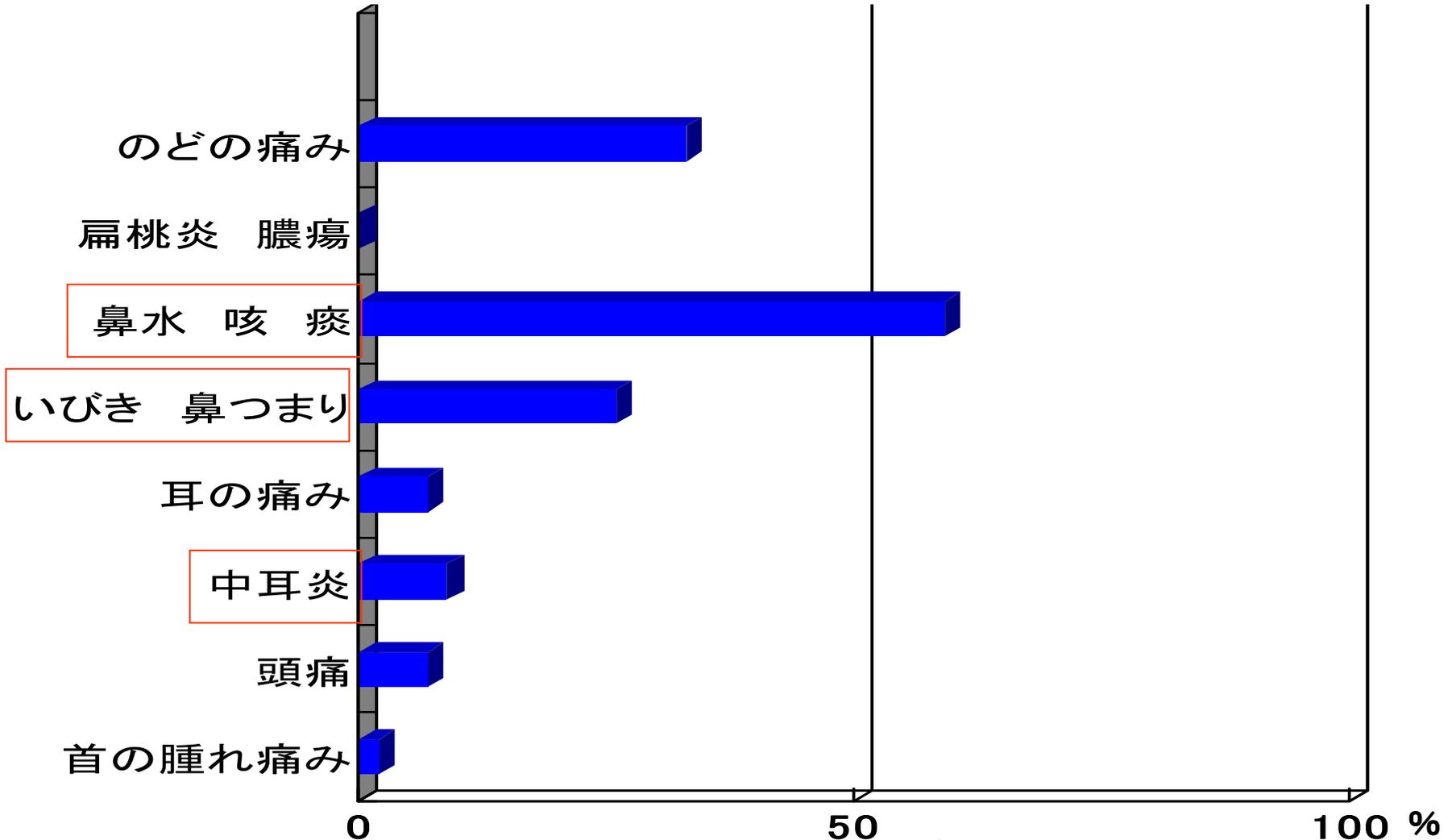
臨床所見 10歳以上



10歳以上はのどの痛みが特徴（扁桃炎 膿瘍発症もあり）

首の腫れ痛みも注意

臨床所見 0-9歳



0-9歳は喉の痛みが少なく
他の上気道炎症症状が多い 中耳炎も注意

急性中耳炎の溶連菌陽性率 を追加検討

2010年11月から

2011年3月7日までの

小児 急性中耳炎 症例中

溶連菌検査施行 12件

陽性 5件 **陽性率 41.7%**

A群溶血性連鎖球菌感染症

- 咽頭炎、膿痂疹、蜂巣織炎、まれに猩紅熱。他に中耳炎、肺炎、化膿性関節炎、骨髓炎、髄膜炎などを起こす。また、免疫学的機序を介してリウマチ熱や急性糸球体腎炎を起こす。
- 学童期小児に最も多く、3歳以下や成人では典型的な臨床像を呈する症例は少ない。
- 学校での咽頭培養を用いた研究によると、健康保菌者が15～30%と報告されているが、健康保菌者からの感染はまれと考えられている。

国立感染症研究所感染症情報センターHPより抜粋

治療は二次合併症を予防するため
徹底的な除菌が望ましいとされる

代表 溶連菌感染後**急性糸球体腎炎**

出現頻度0.5%~1%

5~12歳に多く、3歳未満はまれ

感染後2~3週で発症することが多い

急に尿が出なくなり、むくみや血尿が見られ、

血圧が高いと頭痛やけいれん

対策として**発症後3週以降に尿検査**

溶連菌陽性小児への標準的な抗生剤(ペニシリンやセフェム)投与は**10日から14日間**

鼻水 いびき 9歳 女



発熱なし

鼻腔所見良好

咽頭発赤軽度

溶連菌陽性

溶連菌が常在している可能性も？

抗生剤を投与するかどうか悩む場合も？

今回の検討でわかったこと

- 1 溶連菌感染症の症状は多彩
- 2 小児は 鼻水 咳 鼻つまり いびき に要注意
(中耳炎 頭痛 首のリンパ節腫脹も)

対策として

- 1 のどの症状がなくとも咽頭を観察
- 2 受診以前の発熱、咽頭痛の有無を確認
- 3 溶連菌迅速検査による確認
- 4 陽性小児には原則抗生剤を10日間処方
- 5 さらに検尿をおこなえる体制を整備